



<松浦 晃一郎 氏の略歴>

- ・1937年生まれ
- ・1958年東京大学法学部在学中に外交官試験合格、**中退して1959年外務省入省**
- ・1961年米国ハヴァフォード大学経済学部卒業後、経済協力局長、北米局長、
外務審議官(先進国サミットのシェルパ兼任)等を歴任
- ・1994年駐**フランス大使**
- ・1998年**世界遺産委員会議長**
- ・**1999年～2009年第8代UNESCO事務局長**(アジア人初)
 - * 当時縁故人事や不透明経理が横行していた組織内の行政・財政改革を断行、
放漫運営を理由にユネスコ脱退していたアメリカが2003年10月に復帰
- ・2010年公益財団法人 日仏会館理事長



<講演内容>

- ・日本では益々グローバルに活躍する人材が求められている
- ・しかし今の若者は内向きで、1952年のサンフランシスコ講和条約発効当時の緊迫感・切迫感がない
- ・**今日本は大きな曲がり角**に立ちおり、“日本のあり方”が問われている
- ・いや日本だけでなく、世界全体が曲がり角であり、“**持続可能な社会**”が求められている
 - * 地球温暖化: 1992年のリオ・サミットで初めてクローズアップ、95年の京都プロトコルにつながっている
 - * 人口問題: 1999年当時60億人で騒いだが、今や70億人突破
 - * 貧困問題: 1日1ドル以下の絶対的貧困層も減ってはいるが10億人規模
 - * 領土問題、内戦、テロ、etc.

■ 教育

- ・**日本の大学は知識の吸収がメイン**で、皆で議論して考える教育になっていない
- ・UNESCOでは上から目線の「教育(Education)」ではなく、「**生涯学習(Learning)**」を標榜している



<講演内容～続き>

■ グローバル人材

- ・世界の事を考える前に**日本人としての自覚**を持つ必要
- ・その上で異文化に関心を持ち、理解を深める
- ・UNESCOのメンバー国は195か国、公用語は英語と仏語、総会では+スペイン・ロシア・中国・アラビア
 - * **英語は必要最低限、さらに第2外国語**が出来ることがマストに近い
- ・日本人の美点=**チームプレー「和」**
 - * 外国人は個人の能力は高いが、チームとしての総合力は日本人に劣る
 - * 日本は年功序列(特に官僚)だから、3~4年違いの後輩はライバルではなく、育てる対象
 - * 一方国連では10年の差があっても、同僚は競争相手なので、利他の行動を取ろうとしない
(担当者の出張中は誰もその仕事をカバーしないので、書類も仕事も止まったまま)
 - * ワールドカップの観戦態度(ゴミを持ち帰る)や大震災後の秩序正しさなど、モラルの高さ
- ・日本人の欠点(嫌悪点)=(群れたがる?)
 - * 事務局長就任時にはUNESCO本部のあるフランスは特に文化を重んじるだけに、日本文化に染められる事を一部のメディアや識者が恐れた ⇒ 日本からスタッフはほとんど連れて行かなかった
- ・「グローバル人材の心得」
 - * 自分の専門分野を持つ: **ジェネラリストの前にまずスペシャリストたれ**
 - * ポストが上がるにつれて、**大局観**を持つ
 - * **異文化の理解**
 - * 心身ともに健康

「**能あるタカは爪を出せ**」 & 「**責任を取る**」

<感想>

- ・講演スタイルがプレゼン資料なしのスピーチだけだったので、インパクトが弱いように感じたが、国連の舞台上で世界を牽引してきた方だけに、静かな自信に満ちていた



■ 補足:「グローバル人材」になるための10か条

1. 大学でただ知識を吸収するのではなく、その知識を生かして議論すること
2. 日本の歴史や文化をしっかりと勉強すること
3. 常日頃から外国に関心を持ち、異文化に対し理解を深めること
4. 国内問題について国際的な視野で分析し、
それを日本史上のみならず世界史上の位置づけでも考えること
5. 国際言語となっている英語で外国人とコミュニケーションや議論ができること
6. 自分がこれから主として活躍の場にしたいと考えている国や地域の言語を習得すること
7. 自分の専門分野をしっかりと持つこと
8. 色々な問題に対応できる大局観を身につける必要があり、
またその上でしっかり決断を下す力があること
9. グローバル人材がそれぞれの組織でポストが上になり、部下を持つようになったときに、
彼らを牽引する指導力を持つこと
10. 心身ともに健康であること